南アジア考古学における「インド・アーリア」に関する覚書
－「ポスト・ハラッパー文化」期の社会の復元に向けて
A Memorandum on the 'Indo-Āryan' Problem in the Context of South Asian Archaeology – Towards the Reconstruction of Society during the Post-Harappan Phase

上杉　彰紀
UESUGI Akinori

In this paper, author gives an outline of the problems related to the Post-Harappan Phases in the northern part of the Indian Subcontinent. There have been many discussions by scholars on these problems of the Post-Harappan phase, especially in pertaining to the problem of the 'Āryans' or the Indo-Āryan speakers. Discussions have tended to center around the existence of the Indo-Āryan speakers and cultures as a historical fact or not. While some discussions took the Indo-Āryan cultures for granted, others denied their existence itself by certain archaeological evidences. However, it seems likely that the society during the Post-Harappan Phase would have been more complicated than ever thought before. Therefore, it is necessity to re-examine the archaeological materials thoroughly to reveal how the Harappan society was transformed after the collapse of the urban mechanism, and how the society moved on to the second urbanism in the early historical periods.

1. はじめに

筆者は2004年7月に開催された南アジア研究集会において、「南アジア考古学におけるインド・アーリアの現在」という題で、発表をさせていただいた。その発表では、考古学における「インド・アーリア」研究史について概観し、ポスト・ハラッパー文化期の南アジア北半部の様相について、土器資料を中心に検討した。小稿では、その発表において提示した諸点をまとめることとするが、発表にあたっては問題の所在を明らかにするためにポスト・ハラッパー文化期全般を取り上げたため、かなり全般論的な内容となった。

今後逐一資料の批判的検討を進めていく必要があることはいうまでもないが、インダス都市文明崩壊後のインド亜大陸の様相あるいは、一歩進めて社会の様態を明らかにするためには、広い地域空間の枠組みの中で資料を位置づけ、検討を進めていくことが肝要であるとの認識から、本稿ではひとまず研究集会での発表内容を提示し、それをもって今後の研究の方向性を示すことを目的としたい。

2.「インド・アーリア」に関する2つの見解

南アジアの歴史学・考古学・言語学において、「インド・アーリア」問題はきわめて大きな位置を占めている。特に歴史学の分野においては、「アーリア文化」が歴史時代以降の南アジアにおける文明の成立・展開に大きな役割を果たしたとの認識があり、欠くことのできない存在となっている。この認識に従って、考古学の分野においても、「アーリア文化」を考古学的に把握することが重要課題として位置づけられてきた。

インド独立後の南アジア考古学において、最初に「アーリア文化」を特定しようと試みたのは、ハスティナープラ遺跡の発掘調査を実施したB.B. Lalであろう。ハスティナープラ遺跡ではそれまで編年的位置づけが明確でなかった彩文灰色土器（Painted Grey Ware）が、北方黒色磨研土器（Northern Black Polished Ware）の下層から単独で出土したことから、Lalは先にR.E.M. WheelerとKrishana Devaが策定した北方黒色磨研土器の年代観を手掛りに前1100～800年頃に位置づけ、「アーリア人・文化」との関係性を説いた。この彩文灰色土器の年代観をめぐっては、その後多くの論争が展開されることとなったが、彩文灰色土器を「アーリア文化」の一部とみなす見解はインド人研究者の間では大きく変更されることなく現在にいたっている。

したがって、彩文灰色土器の出自が問題の焦点となるが、この視点から「アーリア文化」の存在を否定的に批判するのが、J.G. Shafferである。彼はパンジャーブ東部での踏査をもとに、いわゆる「後期ハラッパー文化（Late Harappan Culture）」と彩文灰色土器文化の遺跡の間に「分布論」上の断絶がないことを指摘し、後期ハラッパー文化から彩文灰色土器文化への漸移的変化を主張した。このことは彩文灰色土器文化が外来系の文化ではなく、パンジャーブ東部の在地の文化であることを示しており、「アーリア人」の移住を証明する根拠がないと論じたのである。彼のこの見解は、少なくとも考古学の分野においては、「文化連続説」と位置づけることができよう。逆に「アーリア人」と考古学的文化の対比を積極的に論じる見解は、その主張の背景に「アーリア文化」とそれ以前の文化の間に断絶を想定することから、「文化断絶説」と呼ぶことができる。

ちなみに「アーリア文化＝考古学的文化肯定派」の中には、黒縁赤色土器（Black-and-Red Ware）や赭色土器文化（Ochre-Coloured Ware）を「アーリア文化」とみなす研究者もおり、それぞれの主張は多様である。また、インダス文明を構成するハラッパー文化を「アーリア文化」とみなす極端な見解も提示されつつあり、「アーリア文化」と考古学的文化の比定をめぐる状況はきわめて複雑化しつつある。

3.「ポスト・ハラッパー文化」期の問題

インダス文明が広範な地域を社会的・文化的に統合するシステムを有していたことは、イン

ド・パキスタン分離独立後の多くの発掘調査が示すところである。インダス文明の衰退に関しては、かつては自然環境の変化という視点からの研究が中心となっていたが、最近ではそうした自然環境の変化という環境決定論で論じるのではなく、自然環境の変化の中で社会・文化変容が生じた結果、インダス文明が衰退したとする「社会・文化変容論」が、考古学者の側から提示されている。その代表はJ.M. Kenoyerで、インダス文明の社会・文化システムの根幹をなしていた観念世界が解体・変容する中で、インダス文明が衰退あるいは変容したと論じている。

インダス文明の終末期に関する問題を解明するにはさらなる調査・研究の進展を俟つ必要があるが、南アジア北半部各地で、インダス文明後半期から終末あるいはポスト・インダス期に関する情報が断片的ながらも着実に蓄積されつつあり、そうした情報をいかに整理・分析して、終末期に関する仮説を提示していくかが課題となっている。

筆者はこの点に関して、南アジア研究集会の発表の席上で、各地域の文化間の関係性を検討・考察の俎上に載せる必要性を指摘した。というのも、インダス文明を特徴づけていたのが、広範な地域空間に及ぶ社会・文化的統合のネットワーク・システムであるとするならば、そうしたネットワーク・システムがいかに解体されていったのかが考古学研究の対象とされるべきであると理解するからである。例えば、パンジャーブ東部の研究においては、「後期ハラッパー文化」あるいは彩文灰色土器文化のみが考察の対象とされ、一つの地域範囲を閉塞的に前提とし、「アーリア文化」考察の対象とするが、パンジャーブ東部というインダス文明の周縁部のみを取り上げてみたとしても、インダス文明社会のネットワーク・システムの変容を解明することはできないであろう。このことは他の地域においても同様である。各地域の文化が地域間の関係性をいかに構築・維持し、あるいは関係性がいかに変容していったのか、より動態として文化変容の現象を検討していくことが肝要である。この視点はインダス文明終末期に限ったことではなく、その成立期・盛期においても適用されるべきものであり、600年以上にわたって展開したとされるインダス文明の社会・文化を固定的に捉えるのではなく、常に変化し続ける関係性を前提とした上で、インダス文明論を展開していく必要があろう。

上記の視点から南アジア研究集会での発表においては、インダス文明が衰退する前2千年紀前半には、南アジア北半部で地域性の強い地域文化が各地域に成立・展開するが、この時期においても各地域文化間の交流は維持されていることを指摘し、その上で、地域間交流のネットワークの様態が変容していった可能性を論じた。例えば、パンジャーブ平原からドアーブ地方ではH墓地文化、「後期ハラッパー文化」[1]、赭色土器文化がそれぞれの中心分布域を有して展開するが、それぞれの要素が一つの遺跡で併存している状況が認められ、文化間での交流が存在していたことは明らかである。さらに、赭色土器に関しては、ハラッパー式土器の中に祖形を見出すことは不可能で、その器種構成・器形・彩文などの要素は、バローチスターン地方との関係性を想定せざるを得ない状況がある。バローチスターン地方とシンド地方、グジャラー

ト地方が関係を有していたことも断片的ながら明らかにされつつあり、地域を横断する関係性が存在していたことがわかる。

前2千年紀後半になると、パンジャーブ東部では彩文灰色土器が出現し、「後期ハラッパー文化」と、部分的にせよ併存する。彩文灰色土器の出自に関しては、上述のように「アーリア文化」との関係性を前提とする説と、「後期ハラッパー文化」が変容して成立したとする見解があるが、少なくとも彩文灰色土器の代表的器種である直口鉢に関しては、「後期ハラッパー文化」の中から自生的に成立するものではなく、バローチスターン地方との関係性がその出現に作用していると考えられる。その一方で浅い胴部から屈曲して外反する口縁部を有する小形鉢に関しては、彩文灰色土器出現以前の「後期ハラッパー文化」の土器組成の中に同形の小形鉢を見出すことが可能である。今後慎重に検討を進めていく必要があるものの、彩文灰色土器の出現に関してはパンジャーブ東部やバローチスターン地方との広域関係性のもとで考察していく必要がある。

一方、前2千年紀後半の北インド東半部では、黒縁赤色土器・黒色スリップがけ土器を特徴とする金石併用文化が広範に展開するが、この文化の広域展開の過程で、彩文灰色土器と黒縁赤色土器・黒色スリップがけ土器は相互の関係性を強化して、前1千年紀へと展開していくこととなる。ここに地域間交流の舞台はガンジス平原へと移行していくこととなるのである。

ここでは詳細に論じる準備がないが、上述のように、前2千年紀を通して、南アジア北半部には緩やかな関係性を有する地域文化が分立する状況を呈し、相互の関係性のもとで社会が成立していることが仮説できる。この点から重視すべきは、インダス文明の終焉は文化の断絶を示すものではなく、またインダス文明の伝統が変化することなく後世に継承されたわけでもない。インダス文明はある時期の南アジアを取り巻く社会的状況に基盤を置いて成立したものであり、その社会的状況は常に変化し続け、結果的に「都市社会」を支える基盤が消失したことによって「都市社会」は解体し、「村落社会」へと変容したと考えるべきであろう。その変容の過程で、都市社会においてのみ存在しうる文化要素は姿を消すこととなる。しかし、前2千年紀の南アジア北半部の「村落社会」は閉鎖的なものではなく、広い地域をつなぐ交流関係を有するもので、緩やかな関係性を構築し維持していたと考えられる。この点をより詳細に検討していくことが今後の課題である。

4.「インド・アーリア」をめぐる今後の研究課題

「インド・アーリア」の問題を考古学的に検討していくには、前章で指摘した緩やかな広域関係性の変容の過程を明らかにしていくことが求められるであろう。少なくとも考古学的には、前2千年紀を通して文化的断絶性を見出すことはできない。その一方で、前2千年紀の社会は閉鎖的・自己完結的なものではなかったであろうことも、前節で指摘した通りである。

現状では想像の域を出ないものの、文明という一面において社会・文化的斉一性を生み出した社会・文化基盤が消失したことは、前2千年紀の社会・文化の様態をより動的なものへと転じさせた可能性がある。当該時期の南アジア北半部の各地域文化は、遠近の文化と関係性を有しながら展開したと考えられ、さらにその関係性の広がりは、南アジア内部で完結するものではなかったと想定できる。バローチスターン地方であれば、イランや中央アジア方面との関係性を有したであろうし、北西山岳地域は山間部を交通路として、中央アジアやイラン北部との関係性を構築・維持していたと考えられる。また、平原部の文化は平原という地理的環境に立脚した社会基盤を有していたであろう。さらに高原・山間部と平原部がつながりを有していたであろうことも想像に難くない。

「インド・アーリア」問題はこうした前2千年紀の関係性の動態のもとで理解されるべきものである。特定の考古学的文化を「アーリア人・文化」に結びつけて説明することはおそらく不可能であろう。南アジア北半部に展開した広域関係性の中で、前1千年紀の都市社会へと再び変容していく複雑な社会変容の過程の中に、「アーリア人・文化」という概念が形成されていく契機があったと仮説しておきたい。考古学によるその実態の解明は、とりもなおさず広域関係性の変容過程の検討に拠らねばならないであろう。

南アジア研究集会の席上では、参加者の方々から有益なご指摘・ご教示を賜った。今後、小稿で素描した問題の検討を進めていくことを明記して、深謝申し上げます。

註

1）ここでは慣例的に「後期ハラッパー文化」の名称を使用するが、その実態はハラッパー文化の変容要素と、パンジャーブ東部からガッガル＝ハークラー涸河床に展開した「先ハラッパー文化」の要素が混成的に存在するもので、「ローパル＝バーラー文化」あるいは「バーラー文化」と呼ぶのが適切である。いずれにせよこの時期のパンジャーブ東部の社会・文化的複雑性を象徴的に示す考古学的文化であるといえよう。

主要参考文献

ALLCHIN, B. (ed.) 1984 *South Asian Archaeology 1981*. Cambridge: Cambridge University Press.

ALLCHIN, F.R. (ed.) 1995 *The Archaeology of Early Historic South Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.

CASAL, J.M. 1961 *Fouilles de Mundigak*. Paris: De Boccard.

DIKSHIT, K.N. 1984 "Late Harappan in North India". in Lal, B.B. and S.P. Gupta (eds.)1984: 253-269.

ENAULT, J.-F. 1979 *Fouilles de Pirak*. Paris: De Boccard.

ERDOSY, G. (ed.) 1995 *The Indo-Aryans of Ancient South Asia: Language, Material Culture and Ethnicity*. New Delhi: Munshiram Manoharlal.

FRIEFELT, K. and P. SØRENSEN (eds.) 1989 *South Asian Archaeology 1985*. London: Curzon.

GAUR, R.C. 1995 *Excavations at Lal Qila: A Habitational OCP Site and a Unique Copper-Hoard from Kiratpur*. Jaipur: Publication Scheme.

GAUR, R.C. (ed.) 1994 *Painted Grey Ware: Proceedings of Seminar on Archaeology held at Aligarh Muslim University, Aligarh.* Jaipur: Publication Scheme.

KENOYER, J.M. 1998 *Ancient Cities of the Indus Valley Civilization.* Karachi: Oxford University Press.

JACOBSON, J. (ed.) 1986 *Studies of South Asian Archaeology*: New Delhi: Oxford & IBH.

JARRIGE, C. (ed.) 1992 *South Asian Archaeology 1989.* Madison: Prehistoric Press.

JARRIGE, J.-F. 1985 "Continuity and Change in the North Kachi Plain (Baluchistan, Pakistan) at the Beginning of the Second Millennium BC". in Schotsmans, J. and M. Taddei (eds.)1985: 35-68.

JARRIGE, J.-F. and U. HASSAN 1989 "Funerary Complexes in Baluchistan at the End of the Third Millennium in the Light of Recent Discoveries at Mehrgarh and Quetta". in Frifelt, K. and P. Sørensen (eds.)1989:150-166.

LAL, B.B. 1954 "Excavation at Hastinapura and Other Exploration in the Upper Ganga and Sutlej Basin 1950-52". *Ancient India,* 10-11: 5-151. New Delhi.

LAL, B.B. and S.P. GUPTA (eds.) 1984 *Frontiers of the Indus Civilization.* New Delhi: Books & Books.

LUKACS, J.R. (ed.) 1984 *The People of South Asia.* New York: Plenum Press.

MUGHAL, M.R. 1992 "Jhukar and the Late Harappan Cultural Mosaic of the Greater Indus Valley". in Jarrige, C. (ed.) 1992: 213-221.

SANTONI, M. 1984 "Sibri and the South Cemetery of Mehrgarh: third millennium connections between the northern Kachi Plain (Pakistan) and Central Asia". in Allchin, B. (ed.) 1984: 52-60.

SCHOTSMANS, J. and M. TADDEI (eds.) 1985 *South Asian Archaeology 1983.* Naples: Istituto Universitario Orientale

SHAFFER, J.G. 1984 "The Indo-Aryan invasions: cultural myth and archaeological reality". in Lukacs, J.R. (ed.) 1984: 77-90.

SHAFFER, J.G. 1986 "Cultural Development in the Eastern Punjab". in Jacobson, J. (ed.) 1986: 195-225.

SHAFFER, J.G. 1993 "Reurbanisation: the eastern Punjab and beyond". in Spodek, H. & D.M.Srinivasan (eds.) 1993: 53-67.

SINGH, P. 1994 *Excavations at Narhan (1984-1989).* Varanasi: Banaras Hindu University.

SINHA, B.P. (ed.) 1969 *Potteries in Ancient India.* Patna: The Department of Ancient Indian History & Archaeology, Patna University.

SPODEK, H. and D.M. SRINIVASAN (eds.) 1993 *The Shaping of Cities from Prehistoric to Precolonial Times.* London. Hanover and Washington: National Gallery of Art.

STACUL, G. 1969 "Excavation near Ghaligai (1968) and Chronological Sequence of Protohistorical Cultures in the Swat Valley (W. Pakistan)". *East and West,* 19 (1-2): 44-91. Rome.

STACUL, G. 1992 "Swat, Pirak and Connected Problems (Mid-2nd Millennium B.C.)". in Jarrige, C. (ed.) 1992: 267-270.

SURAJ BHAN 1975 *Excavation at Mitathal (1968) and Other Explorations in the Sutlej-Yamuna Divide.* Kurukshetra: Kurukshetra University.

VATS, M.S. 1940 *Excavations at Harappa: being an account of archaeological excavations at Harappa carried out between 1920-21 and 1933-34.* Delhi: Archaeological Survey of India.

VERMA, V.S. 1969 "Black-and-Red Ware in Bihar". in Sinha, B.P. (ed.) 1969: 102-111.